自己確認の効果を規定する要因について

東京大学 八木保樹・土山伸二

An experimental study on the determinants to the effects of self-affirmation

Yasuki Yagi and Shinji Tsuchiyama (*Department of Psychology, Faculty of Letters, University of Tokyo, Bunkyo-ku, Tokyo 113*)

The purpose is twofold: first to examine whether an experience that affirms a valued aspect of the self eliminates the negativity of failure and second, to identify what is the most effective condition of self-affirmation. A 2×3 factorial design was employed: Immediately after having failed and prior to rating the beneficialness of failure experience, 72 subjects were allowed to affirm the real-self that they had built up, or the pseudo-self made by the experimenter. The situation of self-affirmation was (1) that subjects affirmed the self in private or (2) that the experimenter also affirmed the subject's self or (3) that the experimenter added information of another one who had the same aspect of self the subjects had affirmed. The self-affirmation effect was most clear-cut, when the real-self was affirmed, and was also affirmed by the experimenter. This effect was especially pronounced for high self-esteem subjects. Joint effects of high self-esteem, clearer real-self, and its publicity elevated level of self-affirmation.

Key words: self-affirmation, self-esteem, real-self, pseudo-self.

認知的不協和・リアクタンス・不衡平・学習性無力感などの実験場面は、各々、一貫している・自由である・公明正大である・コントロールできる、という個別の自己を脅かすが、本質的にはいずれも全体的な自己の、あるいは(人格全体を代表する意味での)自我の完全性(integrity)を脅かしている。つまり、個別の自己への脅威は、本質的には自我(の完全性)への脅威を意味しているのである。従って、この場合最も必要なことは、個別の自己への脅威そのものを取り除くことではなく、自我の完全性を回復することであり、そのためにはより広範な自己あるいは他の同じように重要な自己が確認できればよいと考えられる。これが Steele (1988) による自己確認(self-affirmation)の理論であり、Steele 自ら、理論を実証するためにいくつかの実験を行っている。Steele のいう“自己”は自己概念(self-concept)、自己像(self-image)のことであり(本論文もこれに倣う)、実際に実験で対象とされたのはポジティブな自己(概念)である。ある実験においてある側面の自己に脅威が与えられても、それとは別の自己を確認する機会(例えば自分について自信のある側面を思い出させる項目を含む質問紙に回答すること)が挿入されると、その実験で生じた脅威が緩和されるのである。例えば Steele & Liu (1983) では、認知的不協和の場面(具体的には強制応諾)で、ポジティブな自己を確認した被験者は、不協和低減行動を起こさないこと、つまり、うっかり書いてしまった反態度

的なエッセイの方向に態度を変えようとしなくなることが示されている。本研究では、この自己確認の手法を Steele が未だ検討していない失敗経験の場面に適用する。失敗経験は、恥(shame)・困惑(embarrassment)につながり、自我にとって強い脅威をもたらすと考えられる。そして人は失敗を経験すると、それを認めないような様々な言い訳を行うが(Snyder, Higgins, & Stucky, 1983), 失敗に際し自己確認の機会があれば、失敗を有意義だったと余裕をもって評価できると考えられる。しかしこのような形で表れると考えられる自己確認の効果も、考慮すべき様々な要因によって影響を受けることが想像できる。本研究は、被験者に失敗を経験させた後、ポジティブな自己を確認できる機会を与え(つまり自分には他にこんないい面があると確認させ)、脅威の緩和を最後のアンケートに反映させるという手続きを基本とし、その基本的手続きを、自己確認の状況という要因(これを SITUATION とする)と確認される自己という要因(これを SELF とする)の組合せによって変化させたいくつかの条件を通して、自己確認の特質を検討しようとするものである。

自己確認の状況 Steele (1988) の理論では、自己確認は他者を意識しないつまりポジティブな自己を一人で確認できればよいとされたが、この点に関して十分な検討がなされていない。Steele (1988) がその根拠に用いたのが、自我への脅威をもたらすものとして強制応諾の場面

が扱われた Steele & Liu (1983) の結果と思われる。Steele & Liu (1983) では被験者の確認した自己の内容が実験者に伝わらない状況であるので理論を実証しているように見える。しかし、伝わった場合が考慮されていないので、伝わることは無関係とは言えない。また、学習性無力感の場面が扱われた Liu & Steele (1986) では自己確認の回答用紙が実験者の手に渡らないことを被験者に明示する配慮がなされていないので、被験者は確認した自己の内容が実験者に伝わったと判断した可能性が考えられる。従って、そのような可能性が考えられる状況で自己確認の効果が見られても、その効果は実験者に伝わったが故に見られたのかもしれず、理論を実証した結果であるかどうかは明かではない。仮に、Steele & Liu (1983) において実験者に伝わる群が設けられていたならば、そして、Liu & Steele (1986) において伝わる群と伝わらない群が明確に区別し設定されていたならば、伝わる群の方がより自己確認の効果が見られたかもしれないのである。また、扱われる実験場面によって結果が異なる、つまり、ある実験場面では伝わらなくても効果があるが別の実験場面では伝わるのが不可欠であり伝わらないと効果がないということも考えられる。例えば、Steele & Liu (1983) において実験者に伝わらなくても自己確認の効果が見られたのは、そこで扱われた強制応諾という実験場面の持つ性質によるのかもしれないのである。いずれにせよ、自分が持つポジティブな自己を、例えば実験者という他者に知ってもらうことの重要性は、Steele の論文を検討することだけから示唆されるわけではない。自己というものが、その言葉の示すように個人的なものではなく、基本的に社会的なものによって規定されているという主張を展開する伝統的な立場が、社会学や心理学では見受けられる (e.g., Cooley, 1902)。一般に役割理論 (role theory) と総称される立場は、社会体系いかにえれば他者と自己との間に存在する密接不離の関係を、総合的な見地から理論化したものである。そこでは、人は、個々の社会的地位を占め、その地位に伴う役割を遂行する存在と考えられている。役割を遂行することは、役割に対して他者が抱く期待に答えることであり、そのことを通して各人の自己意識や自己概念が形成される。そして、役割遂行に対する他者の吟味・評価がポジティブであれば、人は自分を意味づけ価値づけることができる、つまり自己とは社会や他者との関わりの中でこそ意味があり価値を持つと主張されるのである。従って、ある側面の自己が脅かされること、つまり自我への脅威は、他者の吟味・評価のある場合に、いかにえれば他者の眼差しのある場合にこそ生じると考えられる。事実、今回実験場面として取り上げる失敗経験に関して、他者(実験者)に失敗を知られると強い脅威が生じるが、知られないと脅威が弱まるかほとんど見ら

れないとの報告があり (Modigliani, 1971; Frey, 1978; Greenberg & Pyszczynski, 1985)、役割理論の考えが実証されている。この役割理論の立場を踏まえるならば、自己確認という新たな心理学的概念を検討する際にも、確認の対象となる自己が他者に伝わってこそ効果があるという考えは当然生じるのであり、Steele & Liu (1983) の結果を一般化することに抵抗を覚えるのである。他者の前で経験した失敗が生じさせる自我への脅威が、はたして、自分一人で別の側面の自己を確認するだけで緩和されるのだろうか、あるいは、やはり、そのような脅威を緩和するには、実験者に伝わるのが不可欠ではないのだろうか。本研究では、この点を検討することを重要視し、自己確認においてその確認の対象となるポジティブな自己を他者に知ってもらうことの重要性を確かめるため、まず被験者が確認した自己が他者(実験者)に伝わる状況 (public: PU と略) と、伝わらないつまり自分一人で確認する状況 (private: PR と略) を設けることにする。

また、Tesser (1986) によると自分にとって重要な領域であるほどその領域で成功を納めた他者の存在は自我に脅威となるとされている。これまでの実験では、被験者に自己確認の機会を与える際、被験者が確認する自己と同じ側面の自己を持つ第三者の存在を被験者に意識させる条件とそうでない条件を設定し、その違いを検討するという試みはなされていない。しかし、自己確認が効果を持つためには同じ側面の自己を持つ者が他にいないことが重要かも知れない。つまり、確認した自己が実験者に伝わっても、それと同じ側面の自己を持つ第三者がいることを知ると効果は減少するかも知れないと考えられる。この点を検討するため、確認した自己が実験者に伝わりしかもそれと同じ側面の自己を持つ第三者の存在を知る状況 (another one: AO と略) を設けることにする。

確認される自己 これまでの研究を吟味すると以上 3 つの状況を設ける必要があるが、いずれの研究においても被験者が確認した自己は、現実に関係する自己である。Steele (1988) の理論は、確認される自己は根拠のないもの (illusory) でも効果があるとしているが、実証的な検討はなされていない。理論に従うと、例えば実験者によって与えられた偽りのポジティブ・フィードバックが、被験者が現実に関係する自己と同じ効果を持つことになるが、どんなに強い自我への脅威でも、そのような脆い自己を信じることで乗り越えられるとは考え難い。例えば臨床の場面で、誤帰属 (misattribution) によって作られた高揚感は一時的で本質的な治療にならないことがわかっている (Weary, Stanley, & Harvey, 1989)。根拠のない自己確認は、失敗経験のように自我に強い脅威

となる状況では、概して自分が作り上げた現実の自己を確認することに及ばないのではないかと考えられるのである。

しかし、仮に根拠のない自己であっても効果が見られるなら、他者に伝わるのが重要となるであろう現実の自己の場合とは逆に、自己満足の状況でしかないと考えられる。梶田(1988)は、現実との対応を持たない自己概念で自分を意味づけ価値づけようとする者は、強い防衛的構えを取らざるをえなくなり、自閉的・攻撃的になると述べている。つまり他者との接触・比較はひとりよがりの状態に脅威となる。また、Swann & Hill (1982)は、自己概念に一致しないフィードバックを受けても、後で他者と相互作用の機会がある場合は自己概念はそのフィードバックの影響を受けないが、ない場合はフィードバックの方向に自己概念を変化させることを示している。つまり、根拠のない自己を自分一人で確認するとその自己を受け入れてしまうのである。

以上より、確認される自己を、被験者自身が作り上げたもの (real-self: RS と略) と、実験者が作り出したもの (pseudo-self: PS と略) とに分けることにする。

仮説 まず、PU, PR, AO の各々の状況を自己確認の効果があるか・ないかで単純化すると、その組合せは $2^3=8$ 通り考えられるが、全ての状況が効果なしの場合と、自我に脅威となる第三者がいた方が効果があるということを主張する理論は想定できないので、AO の方が PU よりも効果ありの場合を除くと、次の 5 つの典型パターンが残る。

- (a) 3 つの状況すべてが効果がある、つまり自己確認は実験者に伝わることや第三者との比較に影響されない。
- (b) 実験者に伝わる状況 (PU, AO) が効果がある、つまり確認した自己が実験者に伝わってこそ効果がある。
- (c) PU のみが効果がある、つまり確認した自己が実験者に伝わり、しかも自分だけがその側面の自己を持っていないなければならない。
- (d) 自我に脅威となる第三者がいない状況 (PU, PR) が効果がある、つまり自分だけが確認した自己を持っていることが重要で、自分以外の者が同じ側面の自己を持つことを知ると効果がなくなる。
- (e) PR のみが効果がある、つまり他者 (実験者・第三者) との接触・比較なしに一人で確認するときに効果がある。

そして、確認される自己の違いを考慮し、失敗経験を扱う本実験では以下の仮説を立てる。

仮説 1 確認する自己が PS である場合は、RS である場合より概して効果がないだろう。

仮説 2 RS を確認する場合、3 つの状況間を比較すると、PR がもっとも効果がなく PU が最も効果があるだろう。AO の効果はその中間だろう、つまりパターン (b)

か (c)、あるいは AO の値がその間に位置するパターンが見られるだろう。

仮説 3 PS を確認する場合、3 つの状況間を比較すると、PR が最も効果があるだろう。PU だと効果がなくなり、更に第三者の存在を知る条件が加わる AO で最も効果がないだろう。つまりパターン (d) か (e)、あるいは PU の値がその間に位置するパターンが見られるだろう。

仮説 4 以上の議論に加えて、被験者自身は自分を肯定的に捉えているかという点を考慮する必要がある。確認される自己が現実のもので、それが客観的に高い価値を持つように見えても、その人の自尊心 (self-esteem) が高いとは限らない。その自己概念を重要視していなかったり、高い要求水準を持っていたりするなら自尊心は低いままである。自尊心を高めることに寄与していないような現実の自己 (RS) なら、確認の対象となっても十分な効果を生じないと考えられる。従って実験者が作り出した偽りの自己 (PS) との違いは明確でなくなる。また、そのように現実の自己が自己確認の効果を持たないなら、現実の自己が実験者に知られたときにより効果があるという予想も意味がない、つまり状況の違いに応じないと考えられる。いいかえれば自尊心の高い者で条件間の差が顕著となるだろう。この点を検討するため、個人差として自尊心を測定し、分析の際 1 つの要因として考慮する。

従属変数 失敗経験がもたらした脅威が緩和されるということは、失敗が失敗でなくなることで考えられる。つまり、既述の通り、失敗経験を有意義だったと評価できることを自己確認の効果の指標とする。同時に、その評価が自我防衛でないことを調べる指標として、失敗後における、診断性 (diagnosticity) で分類された課題のやりたさを取り上げる。Trope (1983) は、課題を受けた者の能力が高いことを示す高能力診断性も能力が低いことを示す低能力診断性も共に低い課題 A、高能力診断性のみ高い課題 B、低能力診断性のみ高い課題 C、高能力診断性も低能力診断性も共に高い課題 D、の 4 課題を想定している。失敗経験を有意義だったと評価することが、素直に失敗を認めることではなく負け惜しみで強がっているのなら、自分を直視できないと考えられる。しかし、そうした自我防衛ではないのなら、自分のポジティブ・ネガティブ両面の情報を受け入れられるだろう。つまり自己査定 (self-assessment) を行うだろう。具体的には、有意義と評価する条件は、最も正確に自分を診断してくれる課題 D をやりたがり、自分に関して何の情報も与えない課題 A をやりたがらないだろう。また自己高揚的な課題 B をやりたがることが少ないだろうという予想がたてられる。

方 法

実験群と被験者

SELF (RS か PS)×SITUATION (PU か PR か AO) の6条件に各12名ずつ計72名の大学生を割り当てた。SELF 要因のRS群36名は、あらかじめ設定した次の4つのタイプの自己を有する者を9名ずつ集めた。()内はタイプの名称である。すなわち、男性にもてる、美しい・かわいい女子大生 (beauty), 中央官庁に内定している頭脳明晰な東大生 (bureaucracy), 理科系大学院に進学するコンピュータが得意な理系学生 (science), 体育会・運動会に属する学生、あるいは同好会の主将クラス (sport) の4タイプである。beauty 群の被験者は、美人だけが入れるというような実在の社会集団から選ばれた者ではないが、他者が一致して美人と認める女性は自分が美人であるという一貫した社会的強化を受けると考えられる。その結果そのような女性は、例えばある人が体育会の主将になることによって、自分はスポーツに自信のある人間であるというポジティブな自己をもつと同じように、美人というポジティブな自己を持つことができると推測される。今回は二人の評定者に、その容姿について1点から7点の7段階で別々に評価してもらい、両者が5点以上の評価をした女性を beauty 群の被験者とした。なお、PS 群にも9名の女性被験者が含まれ、同じ評定者がその容姿を評価しているが、5点以上の評価は与えられていない。これら女性被験者計18名の容姿の評価は、二人の評定者間の相関が有意に高かった ($r=.91, p<.0001$) ので、二人の評価の平均を各女性が有する容姿についての得点とすると、beauty 群ではその得点の平均点が7段階の中間である4点と比較して(両側検定)有意な差があった ($t(8)=13.91, p<.0001$)。PS 群の女性の平均点との間にも有意な差があった ($F(1,16)=24.5, p<.0001$)。一方、SELF 要因のPS群は、芸術的側面 (art) を対象とするため、特別に芸術的才能に秀でてはいない者を選んだ。つまり、芸術系の大学生や、美術・音楽に関する同好会に参加している者を除外した。また参考として、失敗を経験するが自己確認の機会がない2つの群を設けた。一方は上記の実験群同様検査の選択(後述)を経るC1群(男4, 女2の6名)で、もう一方はそれもないC2群(男5, 女1の6名)である。この2群は手続き3と6が省略される。

手続き

1. 検査の説明

実験者はパソコン一式が設置された部屋に被験者を招き入れ、これから“知的諸能力”の検査を受けていただくと告げた。そして、この検査は“知能検査”と“性格検査”を組合せることで人間の多面的能力を正確に判定できる画期的な検査で、本日の目的は心理学研究

室が昨年から行なっている“日本人大学生の知的諸能力測定とその比較”という研究のためのデータ収集と説明した。

2. 性格検査の実施

実験者は被験者の前で被験者番号を入力した後、被験者にディスプレイの画面に表れた性格検査への回答を要求した。検査はリカート法形式の86の質問が1項目ずつ表示され、回答を入力すると次の項目に代わった。その中には自尊心尺度として、Fleming & Courtney (1984) の自己評価尺度より自己尊重・社会的自信・容姿の3因子24項目(2件法)と、被験者が自分の自己を表明するかどうかをチェックするため“人よりも得意なスポーツがある”(sport), “人を好きになるよりも好かれるタイプである”(beauty) など各タイプに対応する質問2項目ずつの計10項目(5件法)が含まれていた。

3. 自己確認の準備

性格検査が終了すると、実験者は知能検査に移る前に性格検査だけの分析結果を見せると言ってキーを操作した。しばらくして画面にグラフが現われるが、それは自己理解度などの名前が付けられた①-⑤の計数の測定値を結んだ折れ線グラフで、“平均値”と“被験者の値”の2本の折れ線が含まれていた。①, ③, ④, ⑤の被験者の値は“平均値”に近い値となっていた。②には確認する自己のタイプに対応した計数の名前 (beauty: 対人魅力, bureaucracy: 学究能力, science: 理数能力, sport: 運動能力, art: 芸術性・直観性) が付けられていたが、被験者の値はどれも“平均値”よりかなり高い値となっていた。

このフィードバックは、PS群に対して芸術的・直観的な才能を秘めているという自己を与える操作と、各被験者に各々に対応した自己を有することを前もって知らせ、後の自己確認(PS群・RS群共に)を確実にこなわせる目的を兼ねていた。実験者が被験者の持つ自己を承認することの有無は手続き6で操作されるので、ここでは被験者に対して、各自のフィードバックの結果が実験者にはわからないと思わせるように、実験者は画面の見える位置にないように配慮した。約10秒説明なしにグラフを見せた後、知能検査に移った。

4. 知能検査の実施

まず、知能検査の方法とどちらか一方を選択することになる検査A, Bについて説明した資料を読ませた。その際、実験者は“AとBの検査は難易度の差はないが、どちらを選択するかで測定される知能の側面が異なるので、あくまでも自分の意志で選んで欲しい”と強調した。被験者が選択したら、続けて“検査の魅力度アンケート”に記入させた。アンケートは各々の検査の“魅力度”を、-3(全然選びたくない)から+3(とても選びたい)の7段階で、“選択をどの程度自分の意志で

行ったか”を1から5の5段階（高いほど自分の意志）で回答するようになっていた。非選択群である C2 群では実験者が検査 A を指定した。この手続きを経るのは、強制で実験に参加すると動機づけが高まらず失敗の効果が減ると判断されたからである。実際には A, B どちらを選択しても、図形置換課題が行われた。課題は検査用紙の入った透明ボードを見ながら、ランダムに90個並んだ図形が5種類の見本図形のどれと同じであるかを順にキー入力するもので、1試行30秒、練習1回、本試行5回であった。

5. 失敗経験の付与

知能検査終了後、実験者は、これで必要なデータ集めは終了したと告げ、結果に興味を持っているだろうからそれをお見せすると言ってキーを操作した。しばらくして画面に測定されたとする能力のグラフが表れた。それは架空の名前が付けられた①—⑥の計数の測定値を結んだ折れ線グラフで、“平均値”と“被験者の値”の2本の折れ線が含まれていた。実際は全員に同じグラフを見せる。①、②は“平均値”と近いが、③—⑥は“平均値”よりかなり低い値となっていた。グラフが現れると、実験者は、計数を説明した資料を渡し、好ましくない成績を見ている被験者の脇から約10秒無言で画面をのぞき込んだ。これは被験者に自分の失敗が実験者に知られたという事実を与えることで脅威を確実なものにするためであった(e.g., Modigliani, 1971)。更に実験者が“あなたと同じ学年・学部・学科の人の成績を見てみましょう”と言って任意の数字を入力すると、“平均値”よりかなり高い値を示す折れ線が重なって現われた。実験者は再び約10秒被験者の脇からのぞき込んだ。他者の折れ線を表示するのは、自分の悪い成績を見せられて脅威を受けた被験者に、自分と同じ立場の人がよい成績であるのを見せることで更に脅威を確実なものにするためであった。

6. 自己確認

実験者はキーを操作してグラフを消した後、必要なデータは集め終わったがもう少し別のアンケートに協力してほしいと依頼した。被験者が了承したら、実験者は書棚から青いファイルを取り出し被験者の前に開くと、見開きの2頁はアンケートになっており、その際“研究室の作業を行なっている院生が、今日前半にやってもらった性格検査の質を高めるため、種々の質問項目を検討する調査を行なっています。私がおの実施にあたるよう依頼されているのでどうか協力して下さい”と説明した。アンケートは25の項目に対し、どの程度自分にあてはまるかの15段階のリカート法形式で回答するようになっていた(無記名)。これが自己確認となり、25項目の最初の10項目が、各被験者の自己のタイプに合わせた自己確認のための項目であった。例えば、sport 用のものに

は、“学問よりスポーツに打ち込んできた”、“男は運動して汗を流している姿が一番美しい”のようにスポーツに関する10項目が並んでいた。残りの15項目は共通で、“カラオケが好きだ”のように自己確認を阻害しないニュートラルな項目であった。被験者が記入を終えたら、“自己確認の状況”を操作した。

PU 状況 被験者から記入の終わったファイルを受取り、アンケートの回答に一通り眼を通し、被験者が強く自己確認をした事柄について尋ねたり会話をし、被験者の自己を実験者が承認した。その際、実験者としての口調ではなく、あくまでも実験後の何気ない会話を装った。また、art 群はすべて実験者が自己をつくる PS 群であるから、必ずしも自己確認の度合いが高いわけではないので、回答を見て、少しでも被験者が高く回答した項目を探し出して承認した。自己の各タイプに対する実験者の会話例は、“〇〇さん、きれいでスタイルもいいからけっこうモテるでしょ。今まで何人くらいフツてきたの?”(beauty)、“就職はどこですか?(通産省と聞いて)じゃあ僕なんかよりずっと頭いいんですね”(bureaucracy)、“コンピュータとか得意でしょ? うらやましいなあ。将来はずっと大学に残って研究するの? さすが理系はちがうね”(science)、“何かスポーツをやっているんですか?(答えを聞いて)へえ、運動会の〇〇部ですか。すごいな”(sport)、“美術館に行くのが好きなんですね。確かにクリエイティブな仕事に向いてそうですね”(art)であった。

PR 状況 被験者が回答し終わったら、中を一瞥もせずファイルを閉じ書棚の中へ放り込み、このアンケートについては何も触れず次へ移った。

AO 状況 PU と同様の手続きを踏んだ後、実験者が次のことをほのめかした。例えば“そういえば午前中に実験をやってもらった人は、来年の春から日本航空の stewardess になる子だったんだけどね、すごくきれいな人だったな”(beauty)、“僕と一緒に博報堂に就職する人でデザイナー採用の人に実験を頼んだんだけどね、さすがにその人絵がすごくうまいんだ”(art)などであった。

7. 失敗経験の評価

自己確認が終了したら、アンケート“心理学実験への印象についての調査”を行った(無記名)。その際、今後のためにデータ集めに協力してもらった人の意見を参考にしたいので、遠慮せずに思った通りのことを書いてほしいと念を押した。更に、自己確認によるムードで失敗経験の評価が左右されることを避けるため、ムードにとられないで“知的諸能力”の検査について正直に感想を述べてほしいと強調した。ここには“この実験に対して興味を感じましたか”等の21段階のリカート法形式で回答する11項目が含まれていた。

8. 診断性で分類された課題のやりたさ

最後にもう1つ別の調査に協力してほしいと依頼し、“課題の分類について”を行なった(無記名). Trope (1983) の P. 106 を拡大コピーしたものを右側に、その説明を左側に付けた B4 サイズのボードを与え、4つの課題各々についてどのくらいやりたいかを10段階で回答させた。

以上で実験は終了し、実験内容を説明した後、謝礼を渡して退室させた。時間は50分から60分であった。

結 果

操作の有効性(検査選択)

自分の選んだ検査と選ばなかった検査の“魅力度”の差は有意($t(71)=10.19, p<.0001$)であった。選択した検査別に見ると、Aを選択した被験者(28名)における検査Aの“魅力度”の平均点は、7段階の中立点である0点と比較するとその差は有意($t(27)=5.72, p<.0001$)であるが、検査Bの“魅力度”の平均点は、同じく0点と比較するとその差は有意でなく、Bを選択した被験者(44名)における検査Bの“魅力度”の平均点は、同じく0点と比較するとその差は有意($t(43)=10.34, p<.0001$)であるが、検査Aの“魅力度”の平均点は、同じく0点と比較するとその差は有意でなかった。これより被験者は自分の選んだ検査に魅力を感じていたといえる。更に、“自分の意志で選んだか否か”の平均点を、5段階の中間である3点と比較するとその差は有意($t(71)=5.55, p<.0001$)であり、自分の意志で選んだと感じていた。以上すべて両側検定である。

操作の有効性(自己確認)

手続き3の性格検査ならびに6のアンケートと称したものに盛り込まれた質問は、各被験者の持つ自己のタイプに対応してさまざまな側面からその自己について問うものであり、尺度のどちらかの方向に回答すれば自分の持つ自己を表明もしくは認めることになるものであった。今回は各タイプにおける項目どうしの細かな違いは言及せず、当該の自己を持つことを認める方向に回答するほどプラスの得点(どちらでもないを0点)とし、すべての項目の平均得点を分析した結果を報告する。まず、手続き3の性格検査に盛り込まれた2項目について、それらの平均得点を被験者の得点とし、各タイプごとに被験者の得点の平均点を、中立点である0点と比較するとその差は、bureaucracy ($t(8)=8.22, p<.0001$), sport ($t(8)=8.22, p<.0001$) では有意となり、最初から自分の自己を表明していたが、beauty ($t(8)=-.36, ns$), science ($t(8)=-.49, ns$) では有意とならなかった。また art ($t(35)=-2.30, p<.02$) は自分の芸術性を表明しておらず、PS群の被験者として適切であることを示していた。ところが、自己のフィードバックを行なった後、手続き

6において回答させたアンケートに含まれた自己確認のための質問10項目について、それらの平均得点を被験者の得点とし、各タイプごとに被験者の得点の平均点を、中立点である0点と比較するとその差は、beauty ($t(8)=2.90, p<.02$), bureaucracy ($t(8)=4.78, p<.001$), science ($t(8)=4.16, p<.003$), sport ($t(8)=7.28, p<.0001$), art ($t(35)=2.20, p<.03$) と、RS, PSを問わず有意になった。これはフィードバックの効果があり、被験者は自己確認を行なっていたと考えられる。なお、以上のすべての項目を1項目ごとに0点との差を比較すると、平均得点を分析した場合に見られた有意差が見られなくなる項目はあっても、逆の方向に有意差を示す項目は皆無であった。以上すべて両側検定である。

自己確認の効果

1. 失敗経験の評価

アンケートの11項目は因子分析で1因子となったが、今回の報告では意味を明確にするため、相関行列を基に相関係数が有意であるだけでなく.5以上の値を持つ項目のみを使用した。“実験に対して興味を感じた”を中心に最も多くの.5以上の他の項目が関わっていたので、この項目を幹に“参加して有意義だった”、“科学的重要性を認める”、“学んだことが多かった”、“参加した実験がおもしろかった”、“また他の心理学実験に参加したい”の6項目を1から21で得点化し(同意するほど高得点)、その合計を“有意義さ(BENEFICIAL-NESS)”と名付け、自己確認が失敗経験の評価に及ぼす効果の指標とした。

自尊心尺度に対して、全被験者の回答を共通性反復推定を行う主因子法によって1因子性を確認の上、尺度の合計点を算出した(各項目を1.0で得点化し、自尊心が高い方向を1とした)。そして、高群(H)=36名、低群(L)=36名となる中央値(13点)で二分し、要因HLとしてSELFとSITUATIONに加え、失敗経験の評価を対象に3要因の分散分析を行った。その結果、SELFの主効果が有意($F(1,60)=4.77, p<.03$)となり(RS=89.6, PS=78.1), RSである方が失敗経験を有意義であると評価していることが見出された。SELF×SITUATIONの交互作用が有意($F(2,60)=3.34, p<.04$; Figure 1)となったので、PU, PR, AO別に分析すると、SELFの単純主効果(simple main effect)はAOで有意($F(1,20)=8.31, p<.009$), PRで差はなく、PUでその傾向($F(1,20)=3.59, p<.07$)が見られた。RS, PS別に分析すると、SITUATIONの単純主効果はRSで有意($F(2,30)=5.58, p<.008$)となり、PRの値が他の2つの値より小さかった。Figure 1を見ると、RSはパタン(b), PSは(d)もしくは(e)であるが、統計的にはRSのみ意味があり、PSだと状況に拘らず効果がなかった。次の自己査定の結果との関連のため、H, L別に分析す

ると、H でのみ SELF×SITUATION の単純交互作用 (simple interaction) に傾向 ($F(1, 30)=2.71, p<.08$) が見られ、Figure 1 は自尊心の高い者に当てはまった。L では SELF の単純主効果しか有意 ($F(1, 30)=5.27, p<.02$) とならず ($RS=91.6, PS=73.7$)、状況の違いに応じなかった。

なお、RS のタイプによってはこのパターンに寄与していないことも考えられるので、beauty, bureaucracy, science, sport の順に1つずつタイプを落として同じ分析をしたところ、SELF×SITUATION の交互作用の効果が弱まった (順に、 $F=2.78, p<.07$; $F=2.86, p<.06$; $F=2.26, p<.11$; $F=2.82, p<.06$, すべて $df=1/51$)。従って、4つのタイプはどれも寄与していたと考えられる。

C1, C2 群は Figure 1 に示されている。RS の PU, AO 状況と比較して、自己確認がない C1 群は低い値をとり、強制された検査で失敗を経験するという不愉快な状況の C2 群は最も低い値をとると考えられるが、見かけ上その通りになっている。そこで、RS と PS を分け、まず RS に C1, C2 を加えたものを新たに SELF 要因として、HL 要因と合わせて2要因の分散分析を PU, PR, AO 別に試みたところ、AO で SELF の主効果が有意 ($F(2, 18)=4.70, p<.02$) となり、RS と C2 の

Figure 1. Average beneficialness ratings for each experimental condition.

Note: PU: public, PR: private, AO: another one, RS: real-self, PS: pseudo-self.

間に Duncan の多重比較 ($\alpha=.1$) で差があった。SELF×HL の交互作用も有意 ($F(2, 18)=3.31, p<.05$) となったので、H, L 別に行なうと、H でのみ SELF の単純主効果が有意 ($F(2, 10)=6.39, p<.01$) となり ($RS=93.0, C1=87.0, C2=44.0$)、RS と C2 の間に Duncan の多重比較 ($\alpha=.1$) で差があった。また PU で SELF の主効果に傾向 ($F(2, 18)=3.22, p<.06$) が見られ、RS と C2 の間に Duncan の多重比較 ($\alpha=.1$) で差があった。SELF×HL の交互作用も有意 ($F(2, 18)=3.62, p<.04$) となったので、H, L 別に行なうと、H でのみ SELF の単純主効果が有意 ($F(2, 8)=5.23, p<.03$) となり ($RS=94.1, C1=87.0, C2=44.0$)、RS と C2 の間に Duncan の多重比較 ($\alpha=.1$) で差があった。次に PS に C1, C2 を加えたものを新たに SELF 要因として同様の分析をした結果、有意な差は見られなかった。以上、条件によっては自己確認があることで確かに失敗の脅威が緩和されることが示され、また、PS であったり、RS でも PR 状況だと、C2 の程度まで下がることを示された。

2. 診断性で分類された課題のやりたさ

課題 A から D のやりたさについて (得点は -5 から +5 まで、マイナスほどやりたい方向)、その平均点を 10 段階の中立点である 0 点から有意にどちらの方向に隔たっているかを H, L 別に検定したところ、H は課題 A ($t=4.17, p<.0002$)、課題 B ($t=-3.98, p<.0003$)、課題 C ($t=2.15, p<.03$)、課題 D ($t=-4.78, p<.0001$)、L は課題 A ($t=3.99, p<.0003$)、課題 B ($t=-4.46, p<.0001$)、課題 C ($t=2.12, p<.04$)、課題 D ($t=-6.32, p<.0001$) となっていた (以上、すべて $df=35$, 両側検定)。H, L とも、課題 B、課題 D をやりたく、課題 A、課題 C をやりたくないとしていた。つまり一般的傾向は自己高揚、自己査定との両面があった。以下課題ごとに分散分析を行なった。

課題 A SITUATION の主効果に傾向 ($F(1, 60)=2.94, p<.06$) が見られ ($PR=2.75, PU=1.83, AO=0.91$)、PR と AO の間に Duncan の多重比較 ($\alpha=.05$) で差があった。また SELF×HL の交互作用にも傾向 ($F(1, 60)=2.81, p<.09$; Figure 2) が見られ、下位検定を行うと H での RS と PS の間に傾向 ($F(1, 34)=3.02, p<.09$) が見られた。どの群の平均も正の値で、自分に関して何の情報も与えないこの課題をやりたがらないが、自尊心が高く RS の場合に最もやりたがらなかった。

課題 B SELF×HL の交互作用に傾向 ($F(1, 60)=3.25, p<.07$; Figure 3) が見られ、下位検定を行うと H での RS と PS の間に有意差 ($F(1, 34)=4.14, p<.04$) があった。どの群も負の値で、自己高揚的なこの課題をやりたがるが、自尊心が高く RS の場合は最もやりたがらなかった。

課題 C 有意差、傾向共に見られなかった。

課題 D SELF の主効果が有意 ($F(1, 60)=4.57, p<.03$) となり ($RS=-2.9, PS=-1.8$), RS である方が自分に関して正確な情報を与えるこの課題をやりたかった。SELF×SITUATION×HL の交互作用が有意 ($F(1, 60)=3.84, p<.02$) となったのでその意味を探るため、H, L 別に分析すると、H でのみ SELF×SITUATION の単純交互作用が有意 ($F(1, 30)=4.76, p<.01$; Figure 4) となった。Figure 1 とは尺度の方向が逆であることを踏まえると、 RS は想定パターン (b), PS は (e) である。H について PU, PR, AO 別に分析すると、SELF の単純・単純主効果 (simple simple main effect) は AO で有意ではなく ($F(1, 9)=2.68, p<.13$), PR で有意ではなく ($F(1, 9)=2.22, p<.16$), PU で有

Figure 2. Average attractiveness ratings of Task A by Self and self-esteem scale scores.

Note: H: high self-esteem, L: low self-esteem, RS: real-self, PS: pseudo-self.

Figure 3. Average attractiveness ratings of Task B by Self and self-esteem scale scores.

Figure 4. Average attractiveness ratings of Task D for each experimental condition.

Figure 5. Average self-assessment ratings for each experimental condition.

意 ($F(1, 9)=8.34, p<.01$) になった。

ここで、課題 A の得点から課題 D の得点を引いたものを新たに自己査定指標として分析すると（得点が高いほど自己査定を行う方向）、課題 D の場合と同様、SELF の主効果にその傾向 ($F(1, 60)=3.57, p<.06$) が、SELF×SITUATION×HL の交互作用に有意差 ($F(1, 60)=2.97, p<.05$) が見られ、H, L 別に分析すると H でのみ、SELF×SITUATION の単純交互作用が有意 ($F(1, 30)=3.65, p<.03$; Figure 5) となった。H について PU, PR, AO 別に分析すると、SELF の単純・単純主効果は AO では傾向 ($F(1, 9)=4.57, p<.06$) が見られ、PR で差はなく、PU で有意 ($F(1, 9)=6.74, p<.02$) となった。また RS, PS 別に分析すると、SITUATION の単純・単純主効果は PS で有意 ($F(2, 30)=4.01, p<.02$) となり、PR が他の 2 つより値が大きかった。Figure 5 を見ると、RS はパタン (b)、PS は (d) もしくは (e) であるが統計的には PS が (e)、RS は (a) であった。Figure 4 や Figure 5 は Figure 1 と見かけ上同じであるが、“有意義さ”では RS が (b) であること、自己査定では PS が (e) であることが強調されている。これらの結果を合わせ見ると、まず、失敗を有意義だったと評価できる RS の PU, AO 状況は、自己査定の指標においても相対的に高い値となり自分を直視しようとしていた。これは“有意義さ”が自我防衛でないことを意味している。RS の PR 状況は自己確認の指標である“有意義さ”において効果が見られなかった。しかし自己査定の指標においては、Figure 4 や Figure 5 でも見かけ上は Figure 1 と同じパタンが見られるので、PR 状況だとなんらかの形で自己査定にも影響する可能性が示唆されるが、少なくとも今回の結果では RS である限り自分を直視できることが示された。PS の PR 状況は自己査定を行うことが示された。しかし、それと見かけ上同じパタンが Figure 1 で見られたが統計的には有意ではなく、PS だとどの状況でも失敗の脅威を乗り越えられないことが示された。

なお、自己査定において自尊心の高い者は $C1=3.0$, $C2=2.0$ の値であるが他の群との間に有意な差は見られなかった。これについては、指標としての測定感度を再考したり、HL が絡まった 3 重交互作用でしか見られないことを踏まえ、被験者数を増やす工夫が必要と思われる。

考 察

まず、“有意義さ”において RS のパタンが (b) となり、仮説 2 は支持された。同じ側面の自己を持つ第三者の存在は効果を阻害せず、実験者に伝わることの重要性が強調され、実験者に伝わらないと効果は見られないという今回の結果は、自己確認は自分自身に行えばよいと

いう Steele (1988) の理論に対する初めての実証的反例となった。しかし、実験者に伝わらないと効果が見られないという点は、Steele & Liu (1983) の結果と異なっている。これは、ある実験場面では伝わらなくても効果があるが別の実験場面では伝わるのが不可欠であることを意味していると考えられる。それでは Steele & Liu (1983) で自己確認の効果が見られたのはどう解釈できるだろうか。それには強制応諾という実験場面の持つ性質に注目しなくてはならない。認知的不協和に関する伝統的な見地 (e.g., Lepper, Zanna, & Abelson, 1970) によると、強制応諾の場面にいる被験者は、自分の態度に根ざした一貫性を、つまり、ある態度を持っていて、時と場所を変えても同じ態度を表明する、あるいは態度に沿った行動をするという一貫性を、うっかり自分の態度とは逆の態度を表明してしまうことによって脅かされていると考えられている。しかし、Tedeschi (1981) の詳細な検討によると、強制応諾の場面にいる被験者の採る行動は、実験者に対して一貫した人間であるという姿を呈示する印象操作 (impression management) の側面が強いことが明らかになっている。つまり、被験者は、うっかり表明してしまった自分の態度とは逆の態度を、本音では信じていないにもかかわらず、その表明を知られた相手(実験者)に対する体裁を取り繕うためだけに維持し続けるのである。被験者は、自分の信ずる態度に反する態度を表明したことから来る一貫した人間であるという自己(概念)への脅威ではなく、今後の態度表明の方向によっては、実験者に一貫していない人間であると判断されてしまうという懸念から来る脅威に直面しているのである。Cialdini (1988) は、後者のような脅威を緩和しようとして維持される一貫性を、R. W. Emerson (1803-82) の言葉を借りて“愚かな一貫性 (foolish consistency)”と称している。これに対して、今回取り上げた失敗経験がもたらす脅威は、例えば Frey (1978) によって、被験者は自分にネガティブ・フィードバックを与えた知能検査に対し、無記名の場合(本実験も回答は無記名)でも低い評価を下し脅威を緩和しようとする(ただし回答が無記名でない場合は低い評価を表面的に控える傾向にある)ことが示されたことから明かなように、実験者に映る姿のみを取り繕えば緩和される脅威ではない。(たとえ嘘をついてでも)他者の眼に一貫しているように映る人間でありたいという自己が脅威を受けることと、自分の信ずる態度を一貫して維持できる人間でありたい、あるいは自分が価値をおく領域において有能な人間でありたいという自己が脅威を受けることとは、各個人にとってはいずれも深刻な脅威であっても、客観的には、前者の脅威は、Cialdini (1988) に倣って、愚かで、よりささやかなものと言えるだろう。そのようなささやかな脅威には自己満足的な自己確認でも効果がある、し

かし失敗経験による強い脅威を緩和するには他者の承認が必要である。このような解釈をすれば、Steele & Liu (1983)の結果と本実験の結果を合わせて理解できると思われる。

ところで、一貫性への脅威をもたらし認知的不協和の実験場面は、強制応諾の他に①努力の正当化、②決定後の偏愛、③禁じられたおもちゃへの評価がある。Tedeschi (1981)はこれらの場面における一貫性の維持は印象操作ではないと考えている。もしその考えが正しければ、本研究の結果に従えば、①—③の場面では確認した自己の内容が実験者に伝わらないと自己確認の効果が見られないと予想される。Steele (1988)は、上記の②の場面を扱って自己確認の効果を見ているが、そこで集められた被験者は実験を専らとする科学志向の者であり、自己確認の操作は彼らに白衣を着用させるというものであった。これは明らかに実験者に白衣を着ている姿が伝わっており、自己確認は自分一人で行えばよいという結論は下せない。以上の考察から示唆されることは、今後自己確認の概念を検討するために、自我への脅威を与える場面として既成の実験場面を利用するとしても、その実験場面がどのような性質を持つのかをまず検討しなくてはならないということである。例えば、自由であることへの脅威として想定されてきたリアクタンスの実験場面も印象操作であることが分かって来ており (Baer, Hinkle, Smith, & Fenton, 1980), Wicklund (1974) は、リアクタンスを、愚かで、不合理で、無益なもの指摘している。このような愚かしさから自分を取り戻すには、一人で自己確認をすれば十分なのかもしれないのである。

自己確認の実験のために扱う場面の検討だけでなく、自己確認の状況に関しても検討すべき点がある。まず、今回の実験では、確認した自己が伝わるのは実験者であった。実験者には失敗を知られているので、脅威の改善に効果的な他者と思われるが、伝わる他者が実験者以外の者であった場合も、自己確認の効果は見られるだろうか。Leary & Kowalski (1990)は、自我への脅威を緩和するために、脅威を受けたことを知らない他者に対して自分の優れている面を呈示する心理機制の存在を示唆している。また、一人で自己確認をする状況でも、被験者が自分を評価してくれるいわゆる重要な他者 (significant other) を想像している場合、それでも効果はみられないのだろうか。以上2点は自己確認の状況に関する今後の重要な検討課題と思われる。

なお、Berkowitz (1988)は、自己確認には自分が有能で価値があるという感情が必ずしも必要ではなく、自分はどんな人間かということ (自己概念の知識構造) が明らかになればよいのであり、それが不明確になった自我を守るのではないかと提言している。もしもこれが正けし

れば、状況の違いによって効果が異なることはないはずであるが、今回の結果はこの提言を支持していない。

次に、“有意義さ”においてSELFの主効果が有意となり、仮説1は支持された。自己査定においてもSELFの主効果が有意となり、RSの方が効果があることが示された。これは確認される自己は根拠のないものでもよいとする理論に反する結果である。

さらに、“有意義さ”においてPSはどの状況でも自己確認の効果が見られず、仮説3は支持されなかった。つまり確認される自己が根拠のないものだと、どの状況であれ失敗経験を乗り越えられないことが示された。従って、PSのPR状況で見られた自己査定を行うという結果は自分を直視するという積極的な自己確認の効果を示しているのではなく、根拠のない自己を自分一人で確認するとその自己を保持し続けてしまう可能性を示唆していると考えられる。冠動脈疾患 (coronary disease) を患ったり死に至る管理者は、外的報酬や拘束に動かされているのに、自主的に生きていて自分を偽っているとされる (Deci, 1980)。なんらかの集団や価値に一時的に同一化し、同一性が確立したかに見えるが、状況の変化によって容易にそれが失われるものを一般に疑似同一性 (pseudo identity) と言う。このような例は自己偽瞞の危険性を物語っており、PSのPR状況もその一例と考えられる。

以上のような自己確認の特質は自尊心が高い者でより明らかとなり、仮説4は支持された。また課題A、課題Bにおいても自尊心の高い者にSELFの主効果が有意となり、RSであることの重要さが明かとなった。自尊心の低い者は、“有意義さ”においてSELFの主効果が有意となったが、状況の違いには応じなかった。これは自尊心の低い者は、客観的には価値があると思われる現実の自己 (RS) を持っていないながらも、それが十全にその人の自尊心を高めることに寄与していないことによると考えられる。また、自尊心の低い者は消極的・恥ずかしがり・笑いやになるのを恐れるなど、常に他者を意識した状態にある (梶田, 1988)。そのような者は、何らかの防衛的な構えをもつので、回答の際に実験条件の差が出なかったという可能性も考えられる。この点に関しては、自尊心の低い者の本音を検出する実験状況や測定方法の問題として今後課題となるだろう。逆に自尊心の高い者は自分の心理状態を素直に表出しやすく、条件の差が出たと考えられる。いずれにせよ今回の結果は、自尊心を高めることとそれが自分が作り上げたあるいは持っている、現実の自己に基づくことの重要性を示唆している。自尊心を高めることは適応的に生きるために不可欠と思われるが、その自尊心を高めた者が、持っている自己は本物か否かという違いを言及する意味があるのである。自尊心の低い者は、まず自尊心を高めることが重

要となる。そして自尊心を高め、偽りではない自己を持ったときに、人はしかるべき、実在のあるいは内在化した他者に自分を示し承認してもらうことがより効果を持つ。このことは、人間が社会的なものによって規定されとする役割理論、より具体的にはいわゆる象徴的相互作用主義 (symbolic interactionism) の人間観に近いと思われる。

引用文献

- Baer, R., Hinkle, S., Smith, K., & Fenton, M. 1980 Reactance as a function of actual versus projected autonomy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 416-422.
- Berkowitz, L. 1988 Introduction. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 21. New York: Academic Press. Pp. 1-14.
- Cialdini, R. B. 1988 *Influence: Science and practice*. 2nd edition. Glenview, Ill.: Scott, Foresman & Company.
- Cooley, C. H. 1902 *Human nature and the social order*. New York: Scribners.
- Deci, E. L. 1980 *The psychology of self-determination*. Massachusetts: D. C. Heath & Company.
- Fleming, J. S., & Courtney, B. E. 1984 The Dimensionality of self esteem: II. Hierarchical facet model for revised measurement scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 404-421.
- Frey, D. 1978 Reactions to success and failure in public and in private conditions. *Journal of Experimental Social Psychology*, **14**, 172-179.
- Greenberg, J., & Pyszczynski, T. 1985 Compensatory self-inflation: A response to the threat to self-regard of public failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 273-280.
- 梶田 徹一 1988 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. 1990 Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, **107**, 34-47.
- Lepper, M. R., Zanna, M. P., & Abelson, R. P. 1970 Cognitive irreversibility in a dissonance reduction situation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 191-198.
- Liu, T. J., & Steele, C. M. 1986 Attribution as self-affirmation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 531-540.
- Modigliani, A. 1971 Embarrassment, facework, and eye contact: Testing a theory of embarrassment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **17**, 15-24.
- Snyder, C. R., Higgins, R. L., & Stucky, R. J. 1983 *Excuses: Masquerades in search of grace*. New York: Wiley-Interscience.
- Steele, C. M. 1988 The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 21. New York: Academic Press. Pp. 86-126.
- Steele, C. M., & Liu, T. J. 1983 Dissonance processes as self-affirmation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 5-19.
- Swann, W. B., Jr., & Hill, C. A. 1982 When our identities are mistaken: Reaffirming self-conceptions through social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 59-66.
- Tedeschi, J. T. 1981 *Impression management theory and social psychological research*. New York: Academic Press.
- Tesser, A. 1986 Some effects of self-evaluation maintenance on cognition and action. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior*. New York: Guilford Press. Pp. 435-463.
- Trope, Y. 1983 Self-assessment in achievement behavior. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 2. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 93-121.
- Weary, G., Stanley, M. A., & Harvey, J. H. 1989 *Attribution*. New York: Springer-Verlag.
- Wicklund, R. A. 1974 *Freedom and reactance*. Pottomac, Md.: Lawrence Erlbaum Associates.

—1990. 7. 17. 受稿, 1992. 3. 14. 受理—